

私の学生時代

航空部の誕生

牧野 伊兵衛

最近ある席上で雑談中、お互に五十の声近くになると子弟の大学進学が身にせまるねという話から発展して、われわれも良き「学生時代」を過したが今の学生も「実に自由でいい」と一しきり思い出に花が咲き、母校のこととなると年とともに古里の懐しさが加わってくるものである。

「ところで京都といえは同志社は実に環境がいいね」「新島襄の精神がまだ生きているね」と突然私の方を見て東京の私大出身のA君が声を高くした。

私は何となくニヤニヤしながらその高説を拝聴していると、京都の持つ美しさと同志社

の環境は、何時見ても実にうらやましい、あれから何十年たった今日もその調和に乱れない、それは環境によつて育つ学生諸君の美意識と、新島精神のいわゆる「ガツガツ」した実利主義一辺倒の人を作らない物の考え方から来ているんだよ、それに違いない、全く羨しいカラーだ。そういう意味のことを話して小生の同意を促した。

新島精神と改まると私も年とともに遠くなり、ただ馥郁とした香りとなつて心の奥深くに匂っている母校の誇りで、それが幸だと思つている。

私の娘は現在同志社女子高校と女子中学に仲よく通学している。いい環境のもので、いいお友達を得て、のびのびと娘らしく育つて行くのを見ていると、A君の言葉もまんざら時代ずれした見当はずればかりのお世辞ではないと思つてうなずきながら聞いていた。

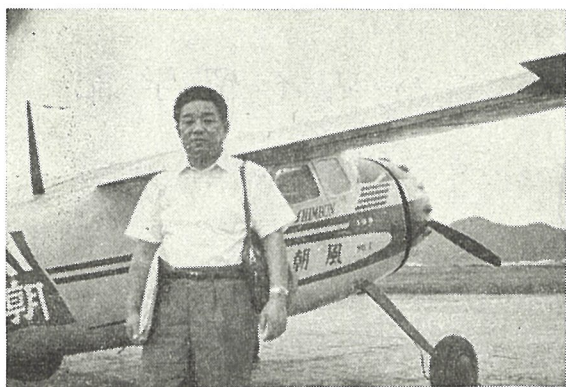
ところで私の学生生活は昭和十一年、当時三年制の予科に入学して、五十人づつ二クラスで非常に家庭的な雰囲気恵まれてスタートした。四、五年前までは国語を除くすべての教科書は英文だったと聞かされて、また実際に語学の時間の多かったことが印象に強

い。

ミセス・クロカワとたしかおつしやつたと記憶しているが、若い美しい外人教授はとくに御所の芝生が好きで、会話のレッスンに何時も歩き回ったこと等何となくロマンチックな青春時代の思い出として記憶が夢のように懐かしい。

勉強は強制されたことがなく、試験もまたさして難関だった記憶はない。毎日何となく教室にいたり、喫茶店にいたり、どちらが多かったか、何をどうして勉強していたのか記憶にない。ただ大学に進んで自由に環をかけた学校の近くを徘徊せず、大いに青春を謳歌し過ぎて学年試験の徹夜の連続だけは今もつてこれさえなければ……とはつきりそのつらさを思い出す。

卒業したのが大太平洋戦争宣戦の年だから、在学時代徐々に軍国調に変わつて行つたはずである。遠いちぎれちぎれの記憶をたぐつてみると、入学した頃は体操と教練とを一人の先生が指導して、まだ軍事教練反対の声があつたように思う。当時、大友先生というたしか予備役特務曹長の先生が（教官とは呼んでいなかった）、実になごやかに「面倒だから今



日はこれで我慢してもらおうや」と片足だけに巻ゲートルをしたわれわれの教練を体操なみに教えておられたように思う。

また剣道場に神棚ができたとか。警察の高が学内に立ち入ったとかで学内ストをや

り、チャペルに何日も籠城したことも思い出

である。

あれも、これも、そんなに切実なものでは

く、若さのはけ口だったような感じでしたか思

士、学部一回生で一等飛行士（当時本職のイ

パロットでも数えるほどの人数だった）の免

状を下附され、もう後輩を指導する先生格に

なっていた。

私の在学中一番の思い出は、同志社にスポ

またグライダースポーツも昭和十年に初め

てドイツ人によつて紹介されたが、もちろん

見過すはずはない。好きこそ何とやらでたし

か学部二年の頃であつたと思う、全日本学生

航空大会で飛行機の方と、第二回全日本学生

グライダー選手権大会でグライダーの方と、

両方とも優勝して大いに同志社の名を天下に

誇示したと自負している。

「学生はすべてのスポーツの先駆者である」

その後、スポーツとしての航空は戦後昭和

二十七年の再開まで終止符をうたれた。

よし、航空スポーツという新しい分野を同志

私は学生時代の飛行機が縁で現在朝日新聞

社の航空部に籍を置いている。もう飛び回れ

ないが取材の仕事の他に後援事業の学生航空

の育成を担当している。

それからは無我夢中だった。雨の日も風の

ときどきではあるが後輩の若さに接してい

ると同志社の息吹きを直に感じ取れる。

も飛行機の組立てやら、修理やら、何でもか

新芽はすくすくと伸びている。実に人柄が

いい、醸し出す空気は青空のように清らかに

感じる。これが同志社だと思う。